

grow to be/verb について : grow up to be/verb との違いから見えるもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: YAGUCHI, Michiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061562

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



grow to be/verb について： grow up to be/verb との違いから見えるもの

家 口 美智子

1. はじめに

grow が to 不定詞を従える構文が現代英語にはある。to 不定詞の動詞は be 動詞が来る場合と一般動詞 (verb) が来る場合があるが、本稿では前者を grow to be、後者を grow to verb、両者をまとめて grow to V と呼ぶ。まず、be 動詞は以下のような例がある。

- (1) a. His mother grew to be old.
- b. His mother grew to be an old lady.

これらは「・・・になる」という変化の意味を表す。(1a) のように形容詞句が来る場合を本稿は grow to be AP、(1b) のように名詞句が来る場合を grow to be NP と呼ぶ。また、grow to verb つまり一般動詞が来る場合も「・・・するようになる」という意味で、(2) のような例があげられる。

- (2) Tom grew to like the scent of the flower.

また、grow の後に up が使われて同じような構文を作る。

- (3) a. He grew up to be rich.
 b. He grew up to be a rich man.
 c. Tom grew up to have many children.

(3a, b) は (1a, b) と対応し、(2) と (3c) は形の上で対応していると言える。本稿では、(3a) と (3b) を grow UP to be、(3c) を grow UP to verb、二つをまとめて grow UP to V と呼ぶ。本稿は Corpus of Historical American English (COHA) を分析して二つの違いに焦点をあてることで、連結動詞 grow to の特徴を明らかにする。

本稿では、「現代英語」とは 1900 年以降の英語を、「現在の英語」とは 1980 年代以降の英語という意味で区別して使う。「構文」とは構文文法における定義で使う。

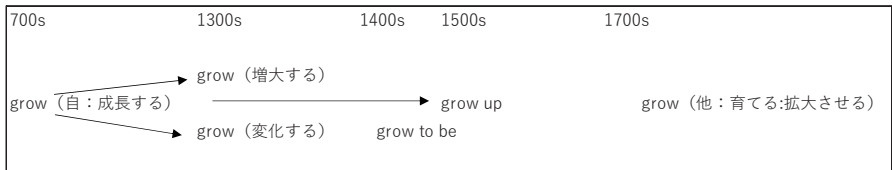
2. grow の用法全体から見る grow to V について

まず、grow について歴史的な推移を概観する。Oxford English Dictionary (OED) によると、自動詞 grow は「(動物、植物などが) 成長する (例: The plant grew very fast)」という意味で古英語から存在する。そして、「(量、サイズ、程度が) 増大する、拡大する (例: The GDP grew by 5%)」という意味が OED の見出し語 grow の中では、中英語期の 1300 年代後半から見られる。つまりは、生物主語だと「成長する」の意味だが、無生物主語が現れると解釈は「増大する、拡大する」ということになる。メタファーで意味が拡大した例であろう。変化を表す用法も同時期に見られ始めた。同じ見出し語の例の中では、1300 年頃に形容詞句を従える grow AP (例: His face grew red) が出現している。grow to/into NP (例: The days that grow to something strange; I grow into gentility perceptibly (2 つの例とも OED より)) という前置詞に助けられて変化を表す例が 1560 年頃からある。to 不定詞を伴う grow to be AP に関しては 1440 年頃に初出、grow to be NP の形だと 1596 年に初出がある。ここでおさえておきたいのは、grow NP という形で変化を表す用法が存在することである。1615 年の例 (Hee will grow frends

with any man...) が初出である。今は NP が来るのは archaic だと記述している。grow to verb の記述は OED にはない。元来の意味である物理的な生物の成長を表す grow がメタファーとして「増大する」や「・・・になる」というように意味が拡張していったことがわかる。

「成長する・大人になる」という意味を表す grow up は OED の見出し語 grow 中の例文では 1535 年の例が初出である。一方、他動詞（例：Tom's growing a beard）の用法は比較的遅く現れ、1774 年の例が初出である。後でもふれるが、他動詞の用法と変化を表す grow NP は同じ形を取る。図 1 は本論文で扱う変化を表す grow と grow up の歴史的な出現の順序の簡略図を示している。

図 1 : grow の発達の流れ



繰り返すと、図 1 から植物や動物が成長する意味から、無生物主語が使われると「増大する」という意味に発達し、grow AP、grow to be のように「・・・になる」という変化を表す意味が発展した。再度、生物が「成長する」という元来の意味に特化した grow up が出てきた様子がわかる。

次に、現在の辞書でどのように記述されているかを見ておく。まず、grow の辞書の記述を見ておく。まず、*Longman Dictionary of American English* 5 版（以下 LDOAE⁵）では以下のとおりである。（太字は原文のままである。）

- (4) 1 PERSONAL/ANIMAL [I] to develop and become bigger over a period of time: Jamie' grown two inches this year
- 2 HAIR/NAILS [I, T] to let your hair or nails become longer: He's growing a beard.

3 PLANTS [I, T] if plants grow, or if you grow them, they develop and become bigger: Not many plants can grow in the fair north. We're trying to grow roses this year.

4 INCREASE [I] to increase in amount, size, or degree: The number of students grew by 5% last year.

5 BECOME [linking verb] to become old, hot, worse, etc. over a period of time: He became more conservative as he grew older.

6 **grow to like/fear/respect etc.** to gradually start to like, fear, etc. someone of something: She had grown to love the city.

7 IMPROVE [I] to improve in ability or character: Beth's really growing as a singer.

8 BUSINESS [T] to make something such as a business become larger or more successful: The president thinks cutting taxes will help **grow the economy**.

grow は、自動詞と他動詞に分かれる。LDOAE⁵の定義の中で、2、3、8 が他動詞で、「何かを育てる、髪の毛などを伸ばす、(ビジネスなどを) 拡大させる」という意味がある。自動詞としては、「生物や髪の毛が物理的に大きくなる・伸びる・成長する」という意味で1、2、3 があてはまる。「精神的に・技術的に成長する」という意味では7で、「数値やビジネスなどが大きくなる」という意味では4、8である。5は grow AP という文型で「become、・・するようになる」という変化を表す。5で連結動詞として定義され、he grew older という例が示されている。6が本論の議論の対象となる構文であるが、意味は5の grow と基本的に同じであるが説明はなく、定型表現である grow to like/fear/respect etc を記述しているのみである。LDOAE⁵にはこれ以上の例も説明もない。(1) のような grow to be の記述はない。grow up に関しては、熟語として取り扱っていて、以下の定義をあげている。(太字は原文のままである。)

- (5) 1. to develop from being a child to being an adult: *I grew up in San Diego.*
 2. **grow up!** (spoken) said in order to tell someone to believe more like an adult

grow to V の説明はあまりされていない。他の英米の学習者用の辞書も見てみる。*Longman Dictionary of Contemporary English* 6 版 (以下 LDOCE⁶) でも基本的には LDOAE⁵ と同じで、5 番目の意味として「become」という意味をあげ形容詞が来る場合と一般動詞が来る場合 (つまり grow to verb) を同じ 5 番目の項目の中で取り扱っている。grow to like/hate/respect の定型表現をあげ、After a while the kids grew to like Mr. Cox と the city he had grown to love の例をあげている。その他 *The New Oxford American Dictionary* や *Oxford Advanced Learner's Dictionary* 6 版でも同様に、「become」という意味の例文で、両者とも grow to like を使った例を提出しているのみである。

日本の辞書は変化を表す項目で to be の用法はあまり説明されてない。『ジーニアス英和辞典』5 版では、形容詞、to do などが grow に続くとしている。ここでも I soon grew to love that job の定型表現の例が出ている。『新英和大辞典』6 版では、「[補語を伴って] 次第 (に) ..になる、なっていく (become, turn) ; 「(to do[be] を伴って) ..するようになる (come)」と説明され、AP、to do、to NP、to NP、into NP の grow の例をあげている。grow tired; grow less; as we grow old; It was growing darker; I have grown to like it; She is growing (up) (to be) like her mother=She is growing to resemble her mother; The sound grew to a shriek; The wind grew into a storm という例文が出ている。『新英和大辞典』6 版のみに、grow to be が記述され、上述のとおり、She is growing (up) (to be) like her mother という up に助けられた例がある。本論で取り扱う構文が全部出ている。

次に、歴史的な推移に移る。まずは動詞 grow の頻度を見ておく。COHA に出てきた[grow]を検索し、総数を見た。図 2 は COHA における頻度をグラフにし、表 1 はそのデータと生起数を示している。

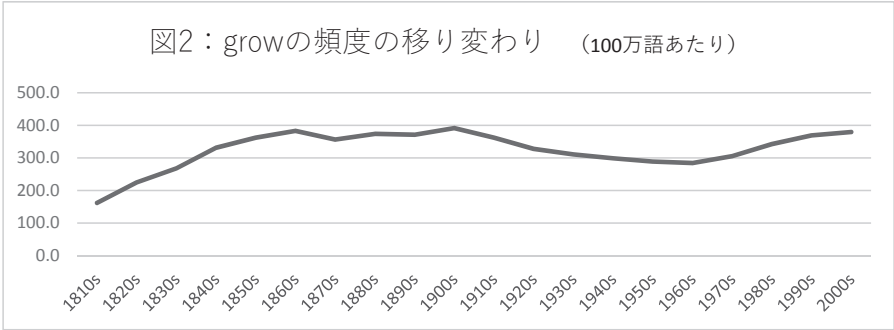


表 1： COHA における grow の 100 万語あたりの頻度と生起数

	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
生起数	391	557	569	5313	5979	6551	6633	7803	7869	6823	8007	8397	7303	7214	7045	6794	7255	6829	10038	11191
頻度 (百万語あたり)	161.7	224.8	267.3	331.1	362.1	382.3	356.4	373.8	371.0	361.3	362.3	327.8	310.3	290.8	288.9	283.3	305.2	342.3	368.9	379.9

図 2 と表 1 より、1810 年代から増えて、1860 年代から 1900 年代に 100 万語あたりピーク時で 400 回ほど使われていたが、その後頻度は漸減し、1960 年代に底を打つが、その後また増える傾向にある。

次に、1810 年代から 2000 年代まで 10 年ごとに 100 例ずつ[grow]を抽出し、どのような用法で使われているかを調べた。自動詞の grow (up)、grow AP（過去分詞を含む）、grow (up) to V、形容詞としての用法（例：growing population）、他動詞の用法の頻度の推移を調べた。図 3 と表 2 がその結果である。

図3：growの用法の移り変わり (%)

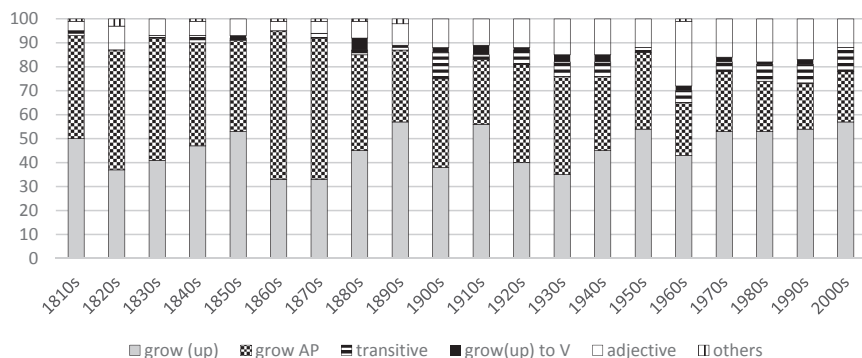


表 2：grow の移り変わり（生起数）

	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
grow (up)	50	37	41	47	53	33	33	45	57	38	56	40	35	45	54	43	53	53	54	57
grow AP	43	50	51	43	38	62	59	40	30	37	27	41	41	31	32	22	25	21	19	21
transitive	2	0	1	3	1	0	2	2	1	11	2	6	6	6	2	5	4	7	8	10
grow (up) to V	0	0	0	0	1	0	0	5	1	2	4	1	3	3	0	2	2	1	2	0
adjective	4	10	7	6	7	4	5	7	9	12	11	12	15	15	12	27	16	18	17	12
others	1	3	0	1	0	1	1	1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0

図 3 と表 2 から現代英語では自動詞 **grow (up)**、他動詞、形容詞は頻度が高まり、変化を表す **grow AP** は頻度を減らしていることがわかる。**grow (up) to V** の頻度はあまり高くないことがわかる。**grow** の様々な用法の中で、頻度が高い、自動詞 **grow**、**grow up**、**grow AP** の 3 つを取り出し、これらの頻度の推移を確認しておく。**grow up** は COHA より **[grow] up** の検索式で直接頻度を求めた。**grow AP** は **grow pp** も **AP** として判断し、**[grow] _j***、**[grow] more/less _j***、**[grow] more and more _j*** と **[grow] _v?n** の総計で頻度を出した。¹ 自動詞 **grow** は表 1 と表 2 に見

¹ **[grow] _v?n** は、**grow pp** の形を抽出した。**grow** の後に副詞を含んだりするケースはカウントしていないが、**[grow] _v?n** は、COHA では 517 例しかないので、カウントしなくてもあまり問題はないと思われる。

られる割合を基準に表 1 に見られる頻度より見積もった。図 4 と表 3 を見られたい。

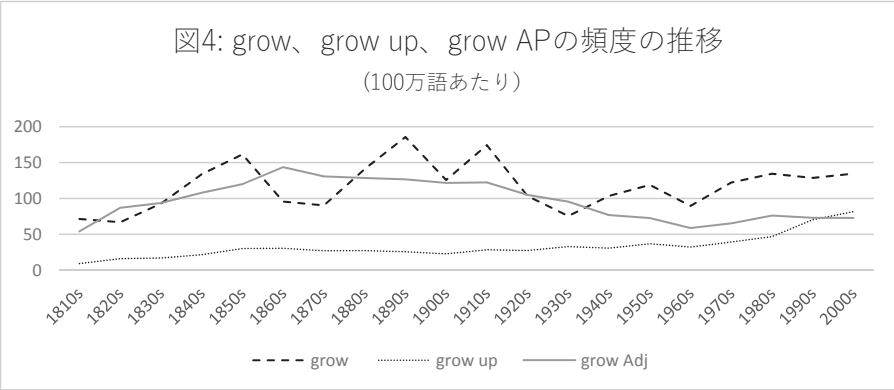


表 3: grow, grow up, grow AP の頻度（100 万語あたり）

	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
grow	71.5	67.0	92.8	133.9	161.6	95.8	90.5	140.9	185.7	125.8	174.3	103.5	75.7	103.7	118.9	89.7	122.3	134.5	128.8	134.7
grow up	9.3	16.2	17.1	21.7	30.4	30.6	27.1	27.4	25.8	22.9	28.5	27.5	33.0	30.8	37.0	32.3	39.5	46.9	70.4	81.7
grow Adj	54.2	87.1	93.7	107.9	120.0	143.7	130.8	128.5	126.7	121.6	122.4	105.0	95.5	76.8	72.8	58.8	65.4	76.2	73.1	72.9

自動詞 grow のデータは上の表 2 のデータにある 10 年ごとから 100 例を抽出した中での割合から算出しているので変化の仕方が大きく揺れているが、傾向はある程度わかる。つまり、増減はあるものの横ばいで推移している。grow AP は 1860 年代にピークを迎えた後、徐々に頻度を減らし、1950 年代から横ばいである。grow up は漸増している。

ここで、上の OED の説明で見た前置詞 to や into を用いて「変化」を表す grow to/into について確認しておくべきであろう。上で見たとおり、grow to/into は変化を表す用法もあるが、「成長する」「増大する」という意味も表すことがある。

- (6) a. ...and how you had grown into a beautiful young woman...
- (1845 年, COHA, Magazine)

b. In just two years the operation has grown to 47 offices in 26 states,...
(2001 年, COHA, Non-Fiction)

grow to/into は (6) にあるように、生物主語 (6a) なら「成長して・・・になる」、無生物主語 (6b) なら「増大・拡大して・・・に達する」という訳も可能だが、変化を表す訳もできる。つまり線引きが難しい。しかし、変化を表す用法として grow to/into を考慮した頻度の推移も調べておくべきであろう。COHA で [grow] to/into で検索をかけ (grow to V の頻度は grow to から減算している)、全ての例が変化を表すと仮定し、それを grow AP に加え、その頻度を自動詞 grow から引いた頻度は図 5 である。

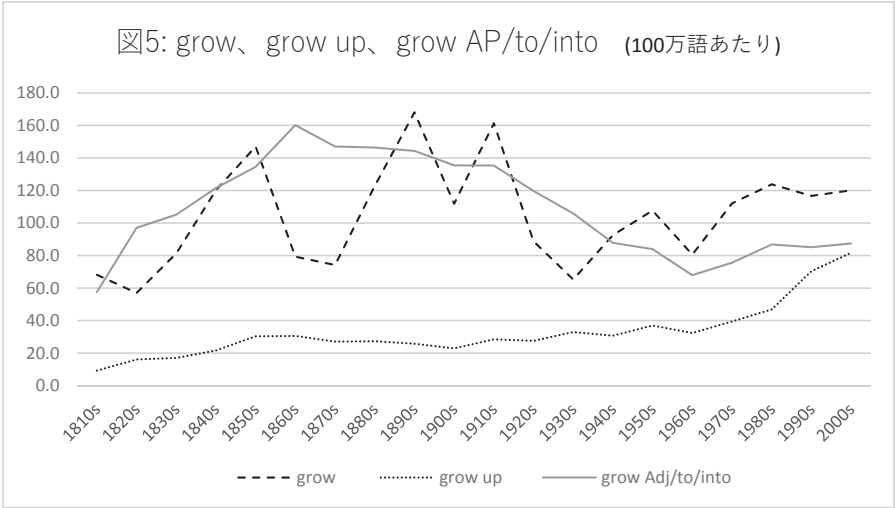


表 4: grow, grow up, grow AP/to/into の頻度 (100 万語あたり)

	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
grow	65.2	57.0	81.4	120.3	147.0	78.3	74.2	123.6	169.1	111.3	161.4	88.8	65.3	92.6	107.7	80.6	112.7	123.6	116.6	120.7
grow up	1.3	16.4	17.2	21.7	30.4	30.6	27.1	27.4	25.0	22.4	28.3	27.4	32.0	36.0	37.0	32.3	36.4	46.3	70.4	81.7
grow AP to/into	57.5	97.0	105.3	121.3	116.6	100.3	147.1	146.4	144.0	135.4	133.1	113.7	116.3	87.0	84.0	68.0	75.9	66.6	65.1	87.4

図 5 は図 4 と傾向が酷似している。変化を表す用法は 1920 年代から 1930 年代より減少し、1960 年代で底を打ち、1980 年代以降は横ばいである。よって、変化を表す用法は現在の英語は 19 世紀に比べて減っていることが確認できた。これ以降 grow to/into に関することは本稿の分析から除外する。

3. grow to V について

まず、本節で扱う構文を再度あげ、用法を吟味する。

- (7) a. He grew to be old.
b. He grew to be a good-looking man.
c. He grew to like her.
- (8) a. He grew up to be rich.
b. He grew up to be a rich man.
c. He grew up to respect his father.

これらの用法で grow to be の場合は、先行研究では対となる to be のない形の構文があるとされる。

- | | | |
|-------|-----------------------------------|-----------------|
| (7a') | He grew old. | (以後、grow AP) |
| (7b') | He grew a good-looking man. | (以後、grow NP) |
| (8a') | He grew up tall. | (以後、grow up AP) |
| (8b') | She will grow up a good Christian | (以後、grow up NP) |

(7a) は (7a')、(8b) は (8b') に対応している。(7b') に関しては「・・・になる」という変化を表す用法で、渡辺他 (1995: 660-2) は古風な構文であるが、インフォーマントによると非文と見なされると説明している。上述のとおり、OED でも、名詞句が補語として使われるのは archaic であると説明している。しかしながら、少し前の文法書である Roberts (1954) はこのような用法を説明し

ているし、COHA でも 1900 年前後までは散見される。現在の英語でも例は見つかる。

- (9) a. She saw him and recognized him as her own son, now grown a young man.
(1898 年, COHA, Non-fiction)
- b. She was grown a big girl, and had a wedding-ring on her hand.
(1895 年, COHA, Fiction)
- c. You had grown a man -- strong and brave -- wise and gentle.
(1920 年, COHA, Fiction)
- d. “I hope I grow a better Boy and that you will have no occasion to be
ashamed of me...” (2000 年, COHA, Non-fiction)

渡辺他のインフォーマントによると、(7b') は同じ構造 (grow NP) を持つ他動詞の存在があるので非文となると判断している。grow to be の構文を raising などみなして考えてみると、raising が起こる元の grow NP はもはや現在の英語では非文であるので、grow to be という構文だけが存在することになる。また、(7a)、(7a') に関して、Hornby (1975: 109) は、(7a) のように形容詞が使われる場合よく省略されると説明している。² しかしながら、上で見たとおり、第 1 に grow AP の方が、grow to V よりはるかに頻度が高いことと、第 2 に OED の初出に関しても、grow AP が grow to be AP より早いことを考えると、省略という考え方は妥当であるとは思えない。実際に、この 2 つの構文に現れる AP の差については、藏菌 (2019) が、詳細な分析をしている。一言でまとめると grow AP は個人的な感情・感覚の変化を表し、grow to be AP は客観的な事実が広く浸透する意味を表す傾向があるということだ。本稿では統語面から差を概観した。Corpus of Contemporary American English (COCA) で検索すると、³ grow

² Hornby (1975: 109) は以下のように説明している。

Grow is used with to-infinitive (though to be is often omitted before adjectives).

³ [grow] Adj と [grow] _v?n、[grow] to be Adj と [grow] to be _v?n で検索している。more 等の副詞が入る例は検索していないが、大まかな傾向はわかる。

AP は、old/strong/large/tired/fast/dark 等が単音節の形容詞が高頻度で使われているが、grow to be AP はこういう形容詞はほとんど使われていない。傾向としては、grow to be AP に pp が使われる例が 18.8% (22/117 例)、grow AP の場合 pp が来る例は 2.8% (803/29,074 例) であることから、2 つの構文は異なる意味を表していると言えよう。つまり、to be は省略されるものではない。それよりもこの 2 つの構文の差は、Haiman (1983) のような認知言語学の基本的な考え方で説明したほうが良い。

(10) X#A#Y

X#Y

X+Y

Z#: word boundary; +: morpheme boundary (Haiman, 1983: 781-782)

(10) で X#A#Y のように、A にあたる to be が表現される場合と X#Y のように to be がない場合を比べると、to be が使われた場合は、X と Y の関係がより時間がかかる、空間的により離れる、概念的により遠くなることが表現されるというコンセプトでこの二つの差を説明したほうが良いであろう。

次に grow UP to be を考察する。(8a) は (8a') に、(8b) は (8b') に対応している。(8b') のような grow UP NP も「主語が成長し/大きくなって・・・になる」という意味の構文であるが、同様に本稿のインフォーマントによると現在の英語では非文とされるが、このような例は COCA では 1950 年前後まで散見される。

(11) a. I want her to have a good chance to grow up a useful woman.

(1884 年, COHA, Fiction)

b. You will grow up a common workman.

(1901 年, COHA, Fiction)

c. He will grow up a holy man and he will teach the word of Allah to all the world.

(1952 年, COHA, Fiction)

一方、(8a') や (8 b) は他の意味を持つ同じ構造の構文も存在する。

- (12) a. I grew up poor in a tiny house with 10 children. (COCA)
 b. I grew up an orphan, like many other children abandoned during the Depression. (COCA)

(12) は AP や NP が付帯状況として使われている。実際、(12a) は (8a') より頻度が高く、COCA 全体では 79% は (12a) の意味を持つ。⁴

以上、二つのフレーズを概観した。以下の節で違いを見ていきたい。

4. grow to V と grow UP to V の差

4.1 separability

まず、separability を考えてみる。grow to V の grow to は come/get to という「・・・するようになる」という変化を表す連鎖動詞である。grow と to を離すことができない。一方、grow UP to V は「成長した結果、・・・になる」という意味を表す。grow up という「成長する・大人になる」という意味の句動詞と to be/verb という結果を表す 2 つの要素からなるフレーズであると直感的には考えられる。実際は、10 億語の語数を誇る COCA のような大規模コーパスで [grow] up (3 語までの要素) to を検索しても grow UP to be/verb の separability を証明する例は (13) くらいしか見つからない。(下線は筆者による。)

- (13) ...some Brothers have overcome their own individual issues of growing up without a father to become outstanding examples of fatherhood in their own homes and communities. (COCA)

しかしながら、インフォーマントに聞いてみると、(14) も (15) も全て文法的

⁴ [grow] up _j* で検索し、形容詞一つにつき 2 例以上使用されている例文を 938 個取り出し、結果を表すのか、付帯状況を表すのかを判断した。

であると言う。

- (14) a. They grew up together to become best friends in their life.
 b. Tomoko grew up in the US to be a native speaker of English.
 c. Michael will grow up fast to help his mother.
- (15) a. They grew up to become best friends in their life.
 b. Tomoko grew up to be a native speaker of English (because she lived in the US when she was young).
 c. Michael will grow up to help his mother.

ネイティブの直観としても separability はあるというものの、実際の英語では grow UP to be/verb はある程度まとまったフレーズとして機能している様子がうかがえる。

4.2 頻度の推移

次に 1810 年以降の頻度の推移を比べる。まず、grow to be と grow to verb の頻度を検証する。図 6 は、COHA で [grow] to _v?i* の検索式で抽出した例を一つひとつ検証し、当該構文に当てはまるものを 1,145 例取り出して頻度の推移を調べたものである。

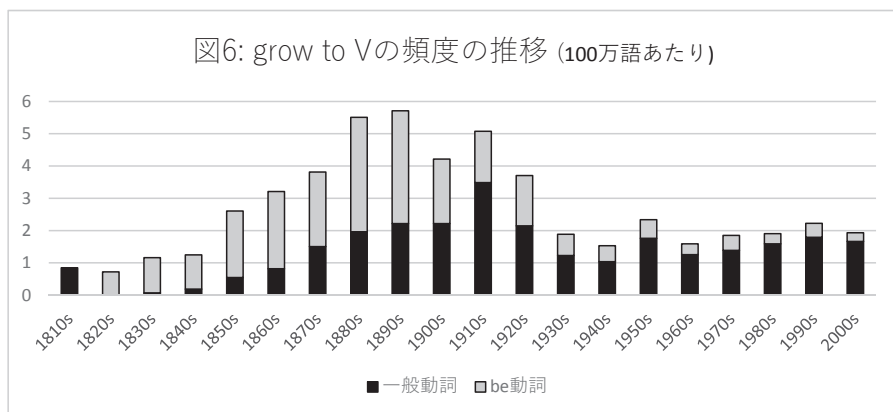


表 5: grow to be、grow to verb の生起数と頻度の推移（頻度：100 万語あたり）

grow to V	1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
一般動詞 生起数	1	0	1	3	9	14	28	41	47	50	79	55	30	25	43	30	33	40	50	49
be動詞 生起数	0	5	15	17	34	41	43	74	74	45	36	40	16	12	14	8	11	8	12	8
一般動詞 頻度	0.8	0.0	0.1	0.2	0.5	0.8	1.5	2.0	2.2	2.2	3.5	2.1	1.2	1.0	1.8	1.3	1.4	1.6	1.8	1.7
be動詞 頻度	0.0	0.7	1.1	1.1	2.1	2.4	2.3	3.5	3.5	2.0	1.6	1.6	0.7	0.5	0.6	0.3	0.5	0.3	0.4	0.3

図 6 によると、grow to be は 1890 年代までは頻度を 100 万語あたり 3.5 回くらいまでを伸ばしていたが、1930 年以降、急速に衰え、現在の英語では、100 万語あたり 0.3 回ほどしか使用されなくなっている。一方、grow to verb は 1910 年頃がピークで、100 万語あたり 3.5 回ほど使用されていたが、現在の英語では 1.5～1.8 回に踏みとどまっている。

辞書のほとんどで、grow to verb に関する記述はあるのに、grow to be は記述がないことを見たが、図 6 に示されたように、現在の英語における grow to be の頻度が少ないので、辞書に記述されていないことは妥当性があると言える。ただし、全くゼロではないので、1 節で見た『新英和辞典』くらいの大型の辞書では記述があることは納得できる。

次に、grow UP to V の推移を見る。COHA で、[grow] up to _v?i* の検索式で抽出した例を手作業で確認し、当該構文でないものを除去し 737 例のデータを得た。まず、図 7 にあるように、grow UP to V の頻度の推移を見る。1810 年代は例がなかったので省いている。

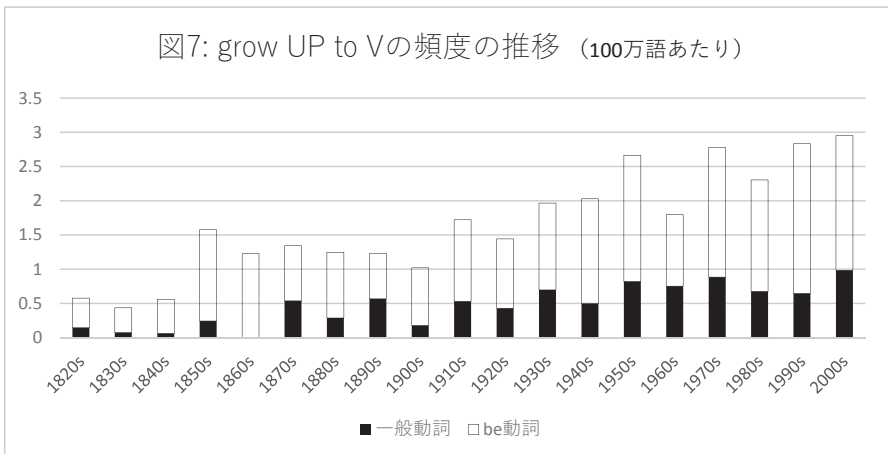


表 6: grow UP to V の生起数と頻度の推移（頻度：100 万語あたり）

	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
一般動詞 生起数	1	1	1	4	0	10	6	12	4	12	11	17	12	20	18	21	17	18	29
be動詞 生起数	3	5	8	22	21	15	20	14	19	27	26	31	37	45	25	45	41	61	58
一般動詞	0.1	0.1	0.1	0.2	0.0	0.5	0.3	0.6	0.2	0.5	0.4	0.7	0.5	0.8	0.8	0.9	0.7	0.6	1.0
be動詞	0.4	0.4	0.5	1.3	1.2	0.8	1.0	0.7	0.8	1.2	1.0	1.3	1.5	1.8	1.0	1.9	1.6	2.2	2.0

grow up と同様に、grow UP to be と grow UP to verb とともに頻度を増やしていることがわかる。特に grow UP to be は伸びが著しい。grow UP to be のほうが常に頻度が高いことがわかる。

ここで、2つの傾向を考査する。この grow to V と grow UP to V の頻度の推移は、同じような意味を表す to 不定詞のないフレーズと同様の傾向を示している。まず、grow AP は、1810 年代から増え始め 1860 年代をピークに減少し続けている。図 6 での grow to V はピークが 1890 年代でその後減っているが、ピークにずれはあるものの、よく似ている、ただし、現在の英語での頻度を比べると、grow AP は grow to be の 36 倍ほど多く使用されている。一方、grow up は漸増し続けているし、grow UP to V も少しずつ増え続けている。1990 年代以降、grow up の頻度は to 不定詞がある構文の約 30 倍ほど使用されている。頻度の面から判断すると、母語話者にとっては grow AP や grow up は to 不定詞がある形よりずっとなじみのある表現である。よって変化を表す用法が減っているから、grow to V も減り、grow up が増えているから、grow UP to V も増えていると言える。

4.3 補語は何が使われるか：grow (up) to be NP か grow (up) to be AP か

まず、grow to be の場合を見てみる。1830 年代から 1910 年代までは 62.0% (235/379 例) の割合で名詞句が来ていたが、1910 年代以降 2000 年代までは 44.2% (57/129 例) が名詞句が現れる状態で推移している。⁵ grow AP も頻度を減らしたが、(7b') のような grow NP が非文であると認識されるところまで

⁵ より詳細には、名詞句の割合には、1830～1850 年代までは 58.5% (38/65 例)、1860～1880 年代までは 64.8% (103/159 例)、1890～1910 年代までは 62.3% (94/151 例)、1920～1940 年代は 47.8% (32/67 例) 1950～1970 年代までは 31.4% (11/35)、1980～2000 年代までは 51.9% (14/27 例) という結果が出た。

頻度を減らしたという事実を考えれば、grow to be NP が一つの構文として認識されているとも考えられる。

次に、grow UP to be には名詞句が来るのか形容詞句が来るのかを確認しておく。名詞句が、1820～1850 年代までは 94.7% (36/38 例)、1860～1900 年代までは 85.4% (13/89 例)、1910～1950 年代までは 87.4% (146/167 例)、1960～2000 年代までは 89.6% (207/231 例) という結果が出た。He grew up to be like his father のような like を使うケースが 18 例もあり、これらを名詞句であるとする名詞句の比率は常に 90%以上ある。なぜ grow UP to be NP の構文が grow UP to be AP より多いのかという疑問がわく。4.1 にも述べたが、grow UP と to be NP/AP は separable な 2 つの要素から成っているため、どちらが使用されても文法的には問題はない。つまり、to 不定詞以下は grow UP と切り離されて概念化されるため、grow UP NP は現在の英語では非文であるものの、grow UP to be NP は 2 つの要素が合体した構文として、grow up そのものの頻度が増えているという環境を追い風に頻度を増やすことができていると考えられる。

grow UP to be AP の割合が少ない理由として、(8a') の用法が少ないということを上で見たが、「成長した結果 AP になる」という意味そのものがあまり表現されることがないのかもしれない。また、名詞句がほぼ 90%以上占めるということは grow UP to be NP が一つの構文として成立していると考えられる。

4.4 grow to verb と grow UP to verb の差

grow to verb から考えてみよう。前述のとおり、LODAE³や他の辞書で広く、grow to like/fear/respect/hate のような定型表現が記述されている。COHA には grow to V の全データの 1,145 例の内、636 例が grow to verb で、その内、247 例が like, hate, fear, respect とそれらと意味が似た動詞 (appreciate, despise, dread, detest, enjoy, feel, loathe, love, resent, respect, revere) である。辞書に幅広く記述されている like は 34 例、一番頻繁に使用されている love は 89 例である。hate は 48 例、feel は 20 例、fear は 6 例、respect は 5 例である。(感情を表す定型表現に含まれないが、hate より頻度が高いのは know で 49 例ある。) 定型表現の割合を見ると、COHA を 4 期に分けて分析すると、1810～1850 年代までは

40.0% (6/15 例)、1860～1900 年代までは 37.7% (69/183 例)、1910～1950 年代までは 38.8% (90/232 例)、1960～2000 年代までは 40.1% (81/202 例) という結果が出た。一般動詞の中で定型表現が現れる頻度は 40%前後で推移しほぼ横ばいである。図 1 で現在の英語では *grow to V* の頻度は横ばい状態であるが、これらの定型表現があるため、*grow to verb* 構文が母語話者に一定の頻度で使用されていると推察できる。

一方、*grow UP to verb* は、COHA の 214 個の例文の動詞の内、一番頻繁に使用されているのは *become* (26/214 例) である。約 10%が *be* と意味の近い *become* が使用されていて、しかも全ての例が *become NP* である点は、*grow UP to become NP* が *grow UP to be NP* の変種として使われていると考えられる。次に頻度が多い動詞は *have* で 214 例中 9 例のみである。広範囲な意味の動詞が使用されていることから、*grow to verb* とは異なる意味を表していることがわかる。*grow to verb* は「・・・するようになる」という意味であるが、*grow UP to verb* は「成長して・・・するようになる」であるので、表す範囲がより広いのだろうと推測する。

4.5 主語（生物主語/無生物主語）に関して

ここで生物主語と無生物主語の割合の推移を見てみよう。自動詞の *grow*、変化を表す *grow AP*、句動詞 *grow up*、*grow up to be*、*grow to verb*、*grow UP to be*、*grow UP to verb* の全体の主語に対する生物主語の割合を図 8 に示す。自動詞の *grow*、変化を表す *grow AP*、句動詞 *grow up* は、図 3、表 2 のデータから算出した。他は COHA に現れた全データから分析した。十分な例文がある 1830 年代から分析し、2000 年代までを 6 期に分けている。⁶

⁶ COHA は 1830 年代ほどまで収納語数が少ないため、図 8 では 1830 年以降のデータのみを分析している。

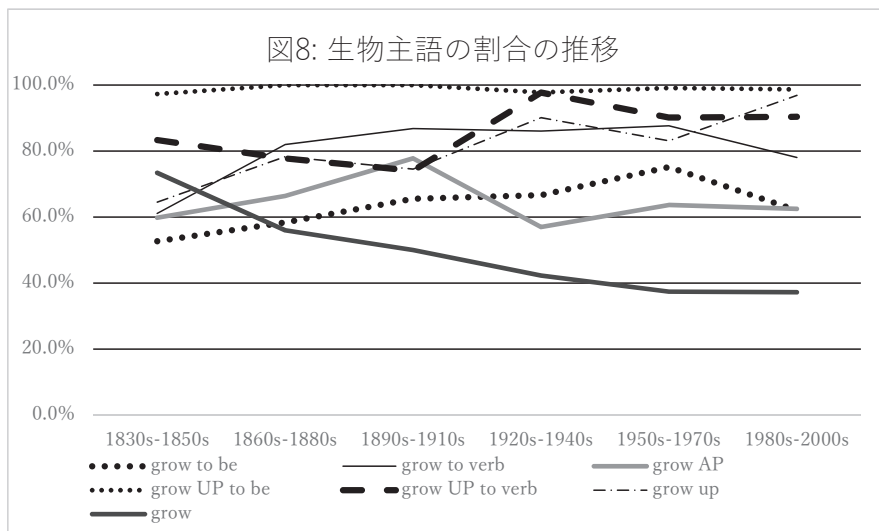


表 7: 生物主語の割合の推移

	1830s- 1850s	1860s- 1880s	1890s- 1910s	1920s- 1940s	1950s- 1970s	1980s- 2000s
grow to be	52.7%	58.4%	65.6%	66.7%	75.2%	62.0%
grow to verb	61.1%	82.0%	86.8%	86.0%	87.7%	78.0%
grow AP	59.8%	66.4%	77.8%	57.0%	63.7%	62.5%
grow UP to be	97.3%	100.0%	100.0%	97.8%	99.1%	98.7%
grow UP to verb	83.3%	77.8%	74.1%	97.7%	90.2%	90.4%
grow up	64.6%	78.3%	74.5%	90.1%	83.1%	96.9%
grow	73.4%	56.0%	50.0%	42.3%	37.4%	37.2%

本論の分析の対象ではない自動詞 **grow** をここで少しだけふれるが、図 8 で明らかのように、一番大きな変化を遂げたのが、自動詞 **grow** である。無生物主語の割合が一貫して増え続けている。2 節で見たとおり、**grow** が無生物主語を取ると (4) の 4 の意味の「拡大する、増加する」の意味になる。現在の英語ではこ

の用法が主流となっていることがわかる。生物主語の「成長する」という原義の使用が減っている。

図8の現在の英語で、生物主語の割合が一番高いのは、grow up のグループで、grow UP to be は 98.7%、grow UP to verb は 90.4%となっている。grow up は 96.9%である。grow up グループは生物主語がノームであると言える。grow UP to be はほぼ生物主語であり、4.3 の考察と併せると、[生物主語]+grow UP to be NP という構文が成り立っていると言える。

grow up グループと自動詞 grow の中間を行くのが、変化を表すグループである。現在の英語では、grow to be が 62.0%、grow to verb は 78.0%、grow AP が 62.5%である。まず、grow up to be と grow AP を考察する。現在の英語では両者とも同じような割合になっているので、ある程度 grow で変化を表す主語の守備範囲が似ていると考えられる。主語の変化を表す場合、本来ならば生物主語/無生物主語とは関係がなく主語が使われると想定される。ここで become と比較してみよう。COCA から 200 例抽出した結果、become NP は 54.7%、become AP は 45.8%の割合で生物主語が使われていて、become AP と grow AP を比べると、約 17%ほどの差で grow AP が生物主語である割合が高い。grow という「生物が成長する」という元来の意味がまだ残っているため、変化を表す場合でも grow to be も grow AP も生物主語と相性が良いと推察できる。⁷

ここで注目したいのは、grow to be が 1830～1850 年代が最も生物主語の割合

⁷ ここでのデータは、動物の身体の一部（例：one's body/eyes/face/voice）、あるいは植物の一部（例：bud、branch）は生物主語としてカウントしている。one's feeling/emotion 等精神的なものは無生物主語としてカウントした。grow AP では、one's face/body/eyes 等が主語として比較的良好に使われている。これらが無生物主語としてカウントすれば、生物主語の割合は、1830～1850 年代までは 49.2%、1860～1880 年代までは 49.5%、1890～1910 年代までは 64.2%、1920～1940 年代までは 48.1%、1950～1970 年代までは 52.2%、1980～2000 年代までは 47.5%となる。表 7 のデータと同様な傾向は示しつつ、10 数パーセント低い割合となる。grow to be/verb に関してはこういう人間や動物の身体の一部が主語になっている例は極めて少ない（全データ 1,145 例中、生物主語は 843 例でその内 11 例が身体の一部を表す）ため、これらが無生物主語としてカウントしても数パーセントしか変わらない。become に関しては、これらが主語になる例はさらに頻度が低い（200 例中 2 例）。

が低い点である。COHA のデータを調べていると面白い事実があることが判明した。驚くことに、grow は主語の選択制限のない raising 機能を持ち合わせた時期があった。

- (16) ...and, in a short time, there grew to be a real liking between them.
(1835 年, COHA, Fiction)
- (17) He has motives which the writers about organized sports did not clearly understand until there grew to be some organization in angling.
(1941 年, COHA, Magazine)
- (18) It grew to be his custom to spend the whole day in wandering about the streets, ...
(1846 年, COHA, Fiction)
- (19) It had grown to be as necessary to her to agree with the views and fashions of the majority...
(1907 年, COHA, Fiction)

(16) と (17) は there 存在文の raising 用法で、COHA には、1835 年から 1941 年まで 7 例見られる。COCA には 2 例ある。(18) と (19) は it が to 不定詞を指すとされている構文の形式主語であるが、1846 年から 1907 年の例まで 9 例ある。COCA にはない。これらは grow が raising 型の動詞になろうとしていた痕跡であるが、現在の英語ではこれらの用法はほぼ消滅している。COHA は 1830 年代ほどまで収納語数が少ないため(1850 年代の語数に比べて 1810 年代は 7.2%、1820 年代は 42.0%、1830 年代は 83.5%、1840 年代は 97.3%)、おそらくは 1810 年代と 1820 年代にも、あるいは 18 世紀もこれらの raising の用法があったと考えられる。ところが、1950～1970 年代には生物主語の割合が増えて 75.2%まで増加した事実は、主語選択のない raising の機能が失われていく過程の傍証ともなろう。

grow to verb は現在の英語において、おそらくは 4.4 で見た人間の感情を表す定型表現が 4 割占めることから生物主語の割合が他の 2 つの構文より高い。しかし 1830～1850 年代は、grow AP 同様 60%前後の割合で、両者ともこの頃が最も生物主語の割合が低い。上述の grow to be でも議論したように、1810 年以前

の英語では、grow の変化を表す用法はおそらくは主語の選択制限が現在の英語よりゆるかったということは想像できる。頻度が減る中、変化を表す用法に関しては、生物主語に関する変化を表そうという回帰現象が起こっているのかもしれない。

5. まとめ

先行研究で grow to be AP の to be は省略可能であり、grow AP の形になるとよく表現されているが、頻度を見ると grow AP が変化を表す grow の母体をなすものである。この grow AP が頻度を減らしているように、変化を表す連鎖動詞としての用法 grow to be も減っている。特に grow to be NP は頻度を減らしている。おそらくは grow NP という「・・になる」という用法が現在の英語では非文となることも一因であろう。grow to be は 20 世紀中盤まで raising の機能も担っていたことも判明した。

grow to verb は 1950 年以降は頻度を横ばい（100 万語あたり 1.7 回程度）に保っている、生物主語がほぼ 8 割使われている構文である。おそらくは辞書にも記載がある grow to like/hate/fear/respect 等の定型表現があるため、母語話者にもなじみのある構文として認識されているのだろうと議論した。

一方、grow up は 19 世紀初頭から漸増している。grow up を使用する grow UP to be も grow UP to verb も頻度を増やしている。grow UP NP が「成長して・・になる」という意味では現在の英語では非文であるとされるが、結果を表す to 不定詞として二つの要素から成り立つ構造であるため文法的な構文として、頻度を増やしているのであろうと推測した。

【付記】本稿は英語語法文法学会第 28 回大会のワークショップで発表した「grow to be/verb 構文と grow up to be/verb 構文はどう違うのか？」に基づいている。中澤和夫先生、五十嵐海理先生より有益な質問をいただいた。ここに謝意を表したい。なお、本稿の成果の一部は科学研究費（基盤研究費(C)：課題番号 18K00672）の助成によるものである。

(金沢大学国際基幹教育院外国語教育系)

辞書

ジーニアス英和辞典 3 版 (2011) 大修館

ジーニアス英和辞典 5 版 (2014) 大修館

Longman Dictionary of American English 5 版 (2014) Pearson

Longman Dictionary of Contemporary English 6 版 (2014) Pearson

Oxford Advanced Learner's Dictionary 9 版 (2015) Oxford University Press

Oxford English Dictionary 2 版 Ver. 4.0 (CD-Rom) Oxford University Press

New Oxford American Dictionary (2010) Oxford University Press

新英和大辞典 6 版 (2002) 研究社

オンラインコーパス

Corpus of Contemporary American English (COCA)

2020 年 3 月～11 月アクセス

Corpus of Historical American English (COHA)

2020 年 3 月～7 月アクセス

参考文献

Haiman, J. (1983) "Iconic and Economic Motivation." *Language* 59(4): 781-819.

Hornby, A. S. (1975) *A Guide to Patterns and Usage in English* (second version)
Oxford: Oxford University Press.

藏菌和也 (2019) 「変化を表す grow の補文」口頭発表 日本英文学会関西支部
第 14 回大会 於奈良女子大学 2019 年 12 月 8 日

Roberts, P. (1954) *Understanding Grammar* New York: Harper.

渡辺登士編 (1995) 『英語語法大事典 第 4 集』東京：大修館

Usages of *grow to be*/verb and *grow up to be*/verb

Michiko YAGUCHI

Abstract

Through the analysis of the Corpus of Historical American English (COHA), this study clarifies the usage of *grow to be*/verb, which expresses change, meaning ‘come to be/verb’, by comparing it with that of *grow up to be*/verb. First, the data of the COHA exhibit that the former shows a sharp decline in frequency after the 1930s, while the latter indicates a constant gradual increase in frequency after the 1830s. Their contrastive transitions are parallel to the changes in frequency of *grow* to express change (e.g. *He grew old*) and *grow up* (e.g. *Mr. Biden grew up in Delaware*) respectively. Second, *grow to be* and *grow up to be* differ in their choice of complement. The use of noun phrases is predominant (more than 90%) in *grow up to be*, but it is less than 50% in *grow to be*. Third, the rate of animate subjects of *grow to be* to the total subjects (62.0% between the 1980s and 2000s) is lower than that of *grow up to be* (98.7% in the same period). In fact, in the data of the COHA, up to the 1940s, *grow* functioned as a raising verb (e.g. *There grew to be a real conflict*). Based on the fact that the rate of animate subjects is low (52.7% between the 1830s and 1850s), the construction seems to have less restrictions in the choice of subjects until the mid-1940s. Fourth, verbs used in *grow to verb* tend to express human emotions (e.g. *like, fear, respect, hate*). These verbs account for 40 percent of all the tokens throughout the data of the COHA. On the other hand, verbs employed in *grow up to verb* display various features.